ます

「重さ」ではなく「かさ（量）」をはかるための箱

節分の時、四角い箱にお豆を入れます。あれが、「ます」です。

「ます」とは江戸時代の計量カップのような道具で、昔の人は「この箱がいっぱいになったら１個分」というように、お米やお酒、お豆などの量をはかっていました。当時は１円玉や100円玉のような「お金」の代わりにお米を使っていたので、「ます」はとても重要な道具だったのです。

バラバラの量を統一させる

昔、「ます」は地域によって大きさがバラバラでした。ある村の「１ます」はたっぷり、別の村の「１ます」は少し、これだとお米を売り買いするときにケンカになってしまいます。そこで立ち上がったのが、みんなのよく知る武将です。

豊臣秀吉は天正18年（1590年）に、「この形以外のますを使っちゃダメ」と法律を作りました。そして寛文９年（1669年）に徳川４代将軍の家綱が、日本中のますを同じ大きさに揃（そろ）えました。これまで「江戸ます」と「京ます」の２種類だったものを「新京ます」に統一して、ズルが起きないように徹底（てってい）したのです。

「新京ます」の厳しいルール

１：大きさをミリ単位で固定する

たて・よこは４寸９分、深さは２寸７分、いまの量でおよそ1.8リットルときっちり決めました。

2：決まったお店でしか作れない

「江戸のます座」「京都のます座」という、認められた特別な職人さんのお店でしか作れませんでした。

3：焼き印（スタンプ）を押す

「これは本物」という証明のスタンプがないものを使うと、厳しい罰（ばつ）がありました。

明治に入って法律でさらに厳しく管理

江戸時代が終わり明治時代に入ると、国は「日本を近代的な強い国にしよう」としました。そこで問題となったのが、いまだに地域によって「ます」の大きさがバラバラだったことです。

そこで明治19年（1889年）に国は新しい法律を作り、より厳しく、「ニセモノのますを使ったら重い罰を与える」と宣言しました。

また、当時の法律では、お米などを売る商売人に対して特に厳しいルールがあり、「米穀（べいこく）1斗（と）以上」という決まりができました。一斗（と）とはおよそ18リットルで、一升瓶（いっしょうびん）10本分ほどにもなるすごい量です。

「大きな取引をする商売人が、いい加減なますを使って国民をだましてはいけない」ということで、国が認めた正しいますを使うことを強く義務付けました。

「世界で一番正確なものさし」を獲得（かくとく）

明治21年（1888年）に日本は、フランスで作られた「メートル条約」という世界の大きな約束ごとに仲間入りします。これは「世界中で長さや重さのルール（単位）をひとつにまとめよう」というもの

で、明治 23 年（1890 年）にフランスから「日本用のメートル原器」が船で届けられました。

このメートルを基準に、リットル（かさ）やキログラム（重さ）も決められるようになったのです。「メートル条約」に入る決断がなければ、日本の「ます」や「ものさし」は、今でも世界とはバラバラだったかもしれませんね。

「ます」の多様化

明治以降、日本ではますます近代化が進み、理科や科学の実験・研究で使われる道具や病院で使われる道具を使う機会が増えました。

そこで明治 42 年（1909 年）に「度量衡法」が改正され、お店で使う「ます」や「はかり」には国が合格を出した検定の印をさらに厳密につけるなど、よりルールが徹底されるようになります。中に入れるものによって専用の箱が設けられ、形やはかり方のルールも厳しく分けられました。

けんちます（検地ます）

けんちますは、年貢のお米をはかるための「国家基準のます」です。一番きびしい基準で作られました。

穀用ます

お米や麦、豆など、乾燥した粒状の食べ物をはかるためのもので、棒でサッと平らにする「すりきり」ではかります。地方によって大きさがバラバラでした。

1 斗ますと 1 升ます
（東京都計量検定所蔵）

雑用ます

石炭や砂利、石灰など、食べ物ではないものをはかる時に使われました。正確さよりも便利さが重視されていました。

液用ます

お酒やお醤油（しょうゆ）、油など、液体をはかるためのものです。金属製であったり、漏（も）れないように内側に工夫したりしたものが多く使われました。同じ一升（いっしょう）でも穀物用とは一致しませんでした。

ガラス製オイルジョッキの誕生

明治から昭和にかけて、液体を正確にはかるために登場したのがガラス製のオイルジョッキです。

昔の「液用ます」は、中身が見えない木の桶（おけ）や金属の入れ物でした。しかしこれだと、表面が泡立（あわだ）っていて本当は少ないのにいっぱい入っているように見えたり、中にゴミが入っていても気づきません。

でもガラス製なら、横から丸見え！　泡の下の「本当の液体の高さ」がハッキリ見えるので、売る人も買う人も安心できるようになりました。

昔、ガソリンスタンドではガラスのオイルジョッキで車やバイクにガソリンを注いでいたんですよ。

重要な体積用の計量器であった木製のますは、時代とともに、ガラス製やプラスチック製の計量器に切り替わっていきました。

そして、昭和 34 年（1959 年）のメートル法実施とその 5 年後の完全移行によって特定の計量器としての役割を終えました。

現在は日本文化の象徴（しょうちょう）として、お酒を飲む器や節分の豆まきなどさまざまな用途（ようと）で活躍（かつやく）しています。